



# おもすの森

発行  
大本山 本門寺 根源  
山務庁  
富士宮市北山4965  
電話 0544-58-1004

日蓮大聖人

御聖訓

『法華題目鈔』

(文永三年一月六日)

譬ば秋冬枯たる草木の、春夏の日に値て枝葉華菓出来するがごとし。爾前の秋冬の草木のごとくなる九界の衆生、法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて、菩提心の華さき成仏の菓なる。竜樹菩薩の大論にいはいはく、「譬えば大薬師の能く毒をもつて薬となすがごとし」云云。この文は大論に法華經の妙の徳を釈する文なり。妙楽大師の釈にいはいはく、「治し難きを能く治すゆえに妙と称す」等云云。

【現代語訳】

たとえば秋から冬へかけての氷や雪で枯れてしまった草木が、春から夏へかけての日に照らされ、芽や葉を出し花を咲かせて果実をならせるようなものである。法華經以前の秋冬の草木にあたる九界の衆生が、法華經の妙の一字である春夏の太陽に照らされて、菩提心の華を咲かせ成仏の木の実をならせるのと同様である。竜樹菩薩は大智度論(だいちどろん)の中で、「たとえば大薬師が毒を変じてよく薬となすがごときものである」といつているが、この文は法華經の妙の徳を解釈したものである。また妙楽大師は、「諸經ではよく治療することのできなかつた難病の人を法華經ではことごとくなおすことができたので、妙と称するのである」ともいつている。

※参考・『日蓮聖人全集』



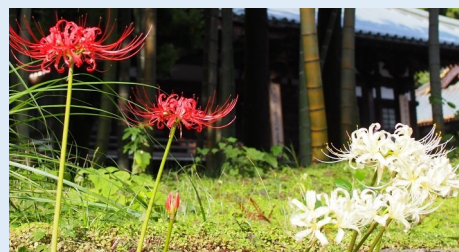
## 第9回 境内清掃奉仕のお願い

10月25日(金)

午前9時～10時半(雨天順延)

11月の当山御会式を迎える為、上記の日程にて、恒例の清掃奉仕を実施致します。

清掃奉仕によって汗を流し、道場荘厳すると共に、自分自身の心の垢も一緒に流しましょう。そして、清らかな気持ちで御会式に是非御参拝下さい。



# おもす道場開催

令和六年八月十七日（十八日）にかけて、本門寺に於いて小・中学生を対象とした第三回「少年少女 おもす道場」を開催致しました。お盆中の台風の影響も心



おもす道場少年少女の皆さん

配されましたが、開催当日は真夏の太陽が降り注ぎ、三十名の子供たちを迎え開校致しました。

一日目は宝探しに数珠作り、縁日・花火等のレクリエーションを盛り込み、学



習の面においては、日常の五心（謙虚・反省・素直・奉仕・感謝）をテーマに役課のお上人方が日常の生活を元に話しました。紙芝居では重須婦人会の方々が、日興上人や日尊上人について披露して下さいました。また各地で活躍する重須孝行太鼓の皆様にお手伝い頂き、太鼓のたたき方、演奏をして頂き、その迫力ある音に興味津々でした。夜には、僧侶マジシャンとしても活躍中の五太子晃龍上人によるマジックショーも行われ、子供達は間近で見るマジックに大興奮し、驚いて



ました。一日目の最後は心を落ち着かせるため、客殿に於いてお題目を無心に唱え一日目が終わりました。

二日目は朝の勤行に参列し、正座した足の痛みも忘れ、一心に手を合わせている姿は、尊いものを感じました。その後、ラジオ体操、広い本堂の掃除、写経、ご両親への感謝の手紙等、日常では体験出来ない数多くの事をこのおもす道場で体験学習し、全員が元氣よく日程を終えました。

閉校式では鈴木執事長より、「当たり前なのが本堂は有難く大事な事で、家族や周りの人に感謝をして、

お題目と唱えると共に素直な心を育てましょう。」と述べられ、一泊二日のおもす道場は今年も無事に閉校致しました。

御礼

ご協賛頂いた関係各聖各位、ことには重須孝行太鼓父母会の皆様には、連日サポートを頂き、感謝申し上げます。

誠に有難うございました。

協賛者芳名（順不同）

- 養仙坊様
- 東陽坊様
- 西之坊様
- 養運坊様
- 蓮行坊様
- 本妙寺様
- 本光寺様
- 福泉寺様
- 小林歌子様
- 重須婦人会様
- 重須孝行太鼓保存会様

法華経に学ぶ

第二十六回

布教伝道部 浦野 弘正

阿脩羅王の物語

前回は阿脩羅王をご紹介したところで終わりましたので、少し阿脩羅王のお話をご紹介します。

阿脩羅王は元々天界にいましたが、天界の王である帝釈天が阿脩羅王の愛娘を見そめ、連れ去りました。憤慨した阿脩羅王は家来を率いて、帝釈天に戦いを挑むのですが、敗れてしまいます。幾度となく戦いに挑む中、いつしか愛娘は帝釈天の虜となつてしまいました。とうとう阿脩羅王の怒りは頂点に達し、闘争を好む鬼となり、ついには天界から追放されてしまったといえます。

阿脩羅王と仏法

しかし、仏法を守護する八部衆と。かつて過ちを犯した者でも救済されることを、阿脩羅王が仏教守護の善神となったことで、暗に教えて下さっているのです。

四人の阿脩羅王はお名前をそれぞれ、婆稚(ばぢ)阿脩羅王、佉摩質多羅(びましつたら)阿脩羅王、羅睺(らご)阿脩羅王といい、この四人の阿脩羅王も百千のお付きを従えてこの座にありました。

四人の迦楼羅王

天龍八部衆の中で最後に登場するのが迦楼

羅王方です。

迦楼羅はサンスクリット語の「Garuda ガルダ」に漢字をあてています。もともとはインド神話に出てくる神の鳥ガルダで、口から金の火を吹き、広げると三百三十六万里にも達するとされる赤い翼を持つことから、「金翅鳥(こんじちよう)」「妙翅鳥(みようしちよう)」と意訳される、鳥の姿をした神さまです。ガルダは、龍(毒蛇)を主食とするとされているのですが、毒蛇は、仏教においては雨風を起こす悪龍とされ、また煩惱の象徴とされているので、毒蛇から人を守り、龍や蛇を食べるが如く、衆生の煩惱(三毒)を食べ、守つてくれることから、今まで出てきた神さまと同じように仏法を守護する神様として、天龍八部衆に加わつたと考えられます。

余談ですが、このガルダは東南アジアでは有名な鳥です。インドネシアの国章に用いられている鳥もガルダで、国営会社であるガルーダ・インドネシア航空はこのガルダから名前がとられています。

この四人の迦楼羅王のお名前がそれぞれ、「大威徳(だいいとく)迦楼羅王」「大身(だいしん)迦楼羅王」「如意(にょい)迦楼羅王」「如意(にょい)迦楼羅王」で、この迦楼羅王も、それぞれ百千のお付きを従えてこの座にありました。

阿闍世王

通序の最後に紹介されるのが、人間界の王である「韋提希の子、阿闍世王」です。阿闍世は、Ajatashatru アジャータシャト

ルを音写したお名前で、古代インドに栄えたマガダ国(現在のビハール州あたり)の王で、父王ビンビサーラを殺害して王位を得たと言われています。

お釈迦様とビンビサーラ王

阿闍世王は、前マガダ国王・頻婆娑羅(ビンビサーラ)と韋提希(ヴァイデーヒー)夫人との間に生まれました。

父・頻婆娑羅はお釈迦様と友人であったとされ、お釈迦様が出家した当初は、カピラ城に帰るよう勧めていたといえます。お釈迦様の出身部族である釈迦族は、コーサラ国によつて征服されており、マガダ国とコーサラ国は敵対関係にあつたため、出家を思いとどまるように説得し、戦象を提供して支援することを申し出たのですが、お釈迦様はこの申し出を拒絶し、頑なに成仏を目指されました。

お釈迦様が覚りを開かれてからは在家信者の中でも一、二を争うほど熱心に帰依されたといひ、出家者が修行するための宿舎である竹林精舎を寄進したり、山頂までの石段を整備したりしました。この道は今でも「ビンビサーラロード」と呼ばれています。

このビンビサーラロードには、「釈尊会」の代表であった、小野兼弘上人の寄進による「霊山橋」という橋も架けられています。

(続く)

## 『本門要軌』を読む 第二十五回

布教伝道部執事 阿部 和正

前回は方便品・寿量品の二品の読誦について問うてまいりました。宗祖や開山上人の教示に随い、本門寺に於ては常の御所作・略の法華経として方便品・寿量品を読誦しております。その他の余品の読誦については如何でしょうか。「されば常には此方便品・寿量品の二品をあそばし候て、余の品をば時々御いとまのひまにあそばすべく候。」（『月水御書』定本二九〇―二九二頁）と宗祖は時々暇のある時に読まれるが良いと教示されます。その一方で當門流に於ては古来より、「読誦謗法」Ⅱ法華経の書写や読誦は謗法、「專唱題目」Ⅱ専ら御題目を唱えることを本義とする論があります。論の依処とする『日興上人御伝草案』に「一部八巻如法経は末法に入ては謗法たるべき事」（『宗学全書』二五六頁）とあります。但し一部八巻Ⅱ法華経廿八品ですが、如法経Ⅱ「一定の規則に従つて写経すること。特に法華経を書写供養し、これを埋経する行事をいう。また供養の法会、書写した経巻をもう。」（『岩波仏教辞典』六四一頁）とあり、伝統的な法華経の書写や供養会を指すのか、法華経そのものを指すものか定かではありません。続いて「神力品云く上行菩薩ノ御言、我等も亦是

の真淨の大法を得て、受持・読誦・解説・書写し之を供養す、又云く要を以て之を言わば、如来一切所有之法・如来一切自在神力・如来一切秘要之蔵・如来一切甚深之事、皆此の経に於て宣示顯説す。是の故に汝等如来の滅後に於て、应当に一心に受持・読誦・解説・書写し説の如く修行すべし。末法には五字に限りて修行すべしと見えたり。取要抄云く日蓮は広略を捨てて肝要を好む。所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華経是也、肝要を取つて末代に當て五字を授与すこと当世異義有る可からず文。」（『宗学全書』二五六頁）と如来神力品の経説、宗祖の『法華取要抄』の教説を示し末法に於ける修行法を、法華経の結要・肝要である御題目の五字と説示しております。さらに「数ヶ条御書の中一部の五種の行都て見えず、たとい之のありと雖も佐渡已前乃至未勤の時の事は（略）権者大聖も初の行儀はかくの如くなれども経文に符合し己証とし給はん御書を用ゆべき事也。」（『宗学全書』二五六―二五七頁）と一部之五種行を認める御書が有つても、佐渡以前の御書や未勤の時の教示であると説示されます。しかし乍ら佐渡以後の御書に於ても、「一庵室を見るに法華読誦の音、青天に響き一乗談義の言山中に聞ゆ」（『忘持経事』定本一一五一頁）「学乗房をもつてはかにつねづね法華経をよませ給えとかたらせ給え」（『千日尼御前御返事』定本一五四七頁）

「二十四日の戌亥の時、御所にすえして、三十余人をもつて一日経かきまいらせ」（『地引御書』定本一九八四頁）等、追善供養や大師講に際し法華経の書写や読誦が確認できます。又一方で「直ちに専ら此経を持つと云うは一経に亘るに非ず、専ら題目を持って余文を雑えず。尚一経の読誦も許さず何に況や五度をや」（『四信五品抄』定本一二九七頁）「今末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし。（略）此の南無妙法蓮華経に余事をまじえば、ゆゆしきひが事也。」（『上野殿御返事』『本門要軌』一〇八一―一〇九頁）とも教示されます。末法には五字に限りて修行すべし。末代に當て五字を授与すとは、末法の下劣機根、逆縁なる私達衆生の成仏に対する者、これに対し順縁なる佛祖三宝・諸天善神に対する法味言上、宗祖先師に対する報恩読誦は別と考えるものか。一部之五種行とは、御題目受持の心を失うて修する五種行の事であると解釈すべきかと存じます。『御義口伝』には「今日蓮等之弘通ノ南無妙法蓮華経ハ體也。心也。廿八品ハ用也。廿八品ハ助行也。題目ハ正行也。正行ニ助行ヲ攝スベキ也云云。」（定本二七一―二七五頁）と説示されております。

ひとまず助行（読経）を終えます。（続く）

## 提灯奉納の御案内

### 合 掌

檀信徒の皆様におかれましては、菩提所並びに当山に護持丹精頂き厚く御礼申し上げます。

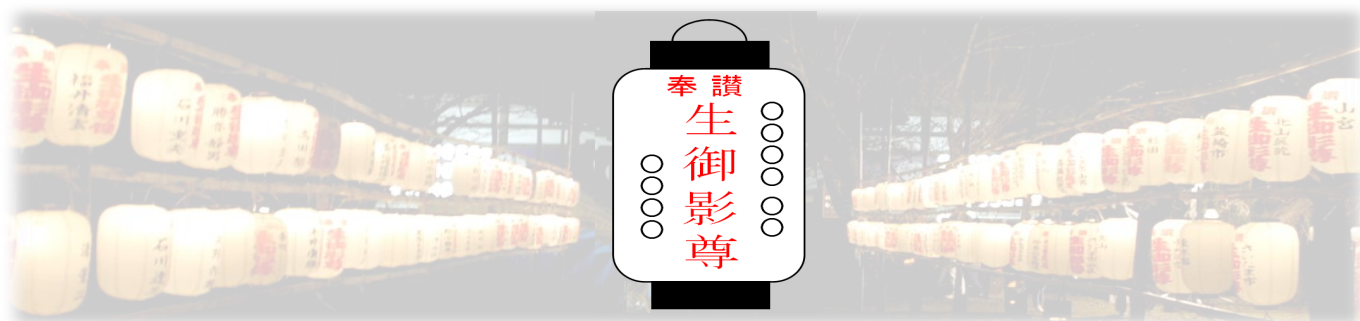
さて、本山として一番大切な行事である御会式（高祖日蓮大聖人の御命日忌）・並びに新年祝祷会には例年、皆様からお申し込み頂いた提灯を点灯し、境内を幽玄に照らし道場を荘厳して参りました。これらにより毎年、御会式・祝祷会の期間には数多くの方々に御参拝を頂いております。

つきましては、当山では年に一度、檀信徒の皆様提灯奉納の御案内をしており、新たにお申し込み頂ける方はもとより、以前に御奉納頂いた方々にも、継続してお申し込み下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

尚、御奉納頂いた皆様には、その篤志を生御影尊にご報告させて頂くと共に、各家の隆昌を御祈念させて頂きます。

再 拜

- 提灯志納料 5,000円（1年ごと更新）  
 申込み方法 同封の郵便振替用紙にてお申込み下さい  
 申込み期限 10月20日 ※新規の方は提灯製作の為お早目にお申込下さい  
 提灯大きさ 尺胴長（縦 約33cm）  
 白地に赤の文字で正面に「奉讚生御影尊」の印刷文字



※生御影尊の右側に住所、左側に御芳名又は会社名をお入れいたします

御奉納頂いた提灯は、11月の初めより御会式（11月13日）までの間、及び新年祝祷会を挟み年末年始の前後約1週間を目安に点灯致します。期間中は当山に是非ご参拝下さい。ご不明な点は当山までお問い合わせ下さい。

執事長 鈴木 春雄

## 秋季彼岸会の御案内

下記の通り、彼岸会法要を厳修致しますので、是非御参拝ください。

日 時 令和6年9月22日（日）  
 午前 10時～  
 場 所 本山 客 殿



